

活性化という言葉の怖さ

RIST幹事(元企画委員長)
熊本大学 教授
中西 義孝



約十年前に熊本大学の教員として着任しました。着任後、すぐに同じ所属の機械系の教授に“熊本に着任しておきながらRISTを知らぬとは言わせない。”とのお言葉を頂き、慌ててHPを拝見し、入会の手続きを行いました。ご本人のお考えからのご発言だったのか、いろいろな方の、いろいろなお考えのもとのご指示だったのか、、、未だに不明です。この十年間、真相解明するのも怖く、ずっと記憶の底にしまっております。

まだまだ若く、なぜ“くまもと(ひらがな)”なのか?も分からない、無知で血気だけ盛んなお年頃でございましたので、会合に初めて参加させていただいた時は、とても新鮮でした。当時の村山会長がRISTの意味がResearch for Innovation & Synthesis of Technology in Kumamotoに変わったことを宣言され、毎月バラエティー豊かなRISTフォーラムが開催され、大きな規模のシンポジウムが開催され…くまもとというところは活気のあるところだな、と痛感する日々でした。大学人として、たくさんの企業の方だけではなく、熊本県や熊本市をはじめとするさまざまな組織の方とお知り合いになれたことも、いまだにすばらしい財産になっております。

宇佐川会長がご就任されたころ、企画委員長という大役を仰せつかりました。その頃より会の“活性化”という話題が持ち上がり、まだ若かったのでやる気マンマンでした。ただの大学教員の一人のくせに、宇佐川会長や委員の皆様と凄いいワイガヤをやった気がします。例えば、大学・高専からの会員が多い割には働いていない…とのご指摘には“棚卸し”と称して、各大学・高専会員様にミッションをお願いしようとしたり、月例フォーラムにたくさんの方が関心をもって来ていただけるように、、、とのご指摘には“その時の話題を入れる”ことができるよう1ヶ月前までフォーラムの内容を決定しなかったり、“金の臭いがしないところに人は集まらない”とご指摘には、毎回助成制度説明会を入れていただいたり…いま考えれば、対投資的効果の薄い、無茶ぶりだらけだったと反省しております。

若くなくなり、一会員としてRISTに関わらせて頂いている現在、今も昔も変わらず活気ある活動が続いていると感じております。ムリに何かしなくても、代々育まれたRIST組織であれば、その懐の大きさゆえ、自然発生的に永続・発展するのでは?と“ゆるく”考えられるようになりました。